

☆☆図書室だより☆☆ ☆第32号☆

☆☆ー 図書委員会よりお知らせ ー☆☆



2019年 4月(前期)～ 2019年 7月(前期) 新規登録書籍をご案内します

書名 (購入書)	著者名など		
戦争とキリスト教 「愛と平和」を説きつつ戦う論理	石川明人 著	中公新書	[茶 190.4 I]
すべてのものとの和解 シリーズ〈和解の神学〉	エマニュエル・カトンゴレ 他 著	日本キリスト教団出版局	[赤 191.04 Ka]
主日礼拝の祈り	越川弘英 吉岡光人 著	日本キリスト教団出版局	[茶 198.36 Ko]
輝く明けの明星 待降と降誕の説教 日本の説教者たちの言葉	平野克己 編	日本キリスト教団出版局	[緑 198.34 Hi]
キリスト教 礼拝の歴史	J.F. ホワイト 著 越川弘英 訳	日本キリスト教団出版局	[茶 196.02 Wh]
イエスのたとえ話の再発見	ヨアヒム・エレミアス 著 南條俊二 訳	新教出版社	[橙 193.6 Je]
上馬キリスト教会の 世界一ゆるい聖書入門	上馬キリスト教会 著	講談社	[橙 193 Ka]
最後の晩餐の真実	コリン・J・ハンフリーズ 著 黒川由美 訳	太田出版	[橙 193.6 Hu]
花と典礼 祭儀における生花	ジャンヌ・エマール 著	オリエンズ宗教研究所	[茶 198.26 Em]
VTJ 旧約聖書注解 列王記上 1～11章	山我哲雄 著	日本キリスト教団出版局	[黄 193.25 Ya 1]

(← 裏へつづく)



ご紹介本

上田充香子 伝道師

『はじめての祈り』

ウィリアム・バークレー 著 吉田信夫 訳 日本基督教団出版局 [青]

「平和」をおぼえて祈る。「平和」はわたしたち人間の力で作り出すことは出来ません。神様によらなければ、「平和」は実現しないと私は思います。8月は特に「平和」について考えさせられる時です。私たち1人1人が神様と向き合い、神様の「真理の平和」を追い求める者でありたいと願います。

『はじめての祈り』は私が18歳の時に牧師に紹介された祈りの本です。祈りの本といっても難しく、長い祈りが多く、なかなか手に取ることがありませんでしたけれども、このバークレーの『はじめての祈り』は親しみやすい言葉で、短く、1日の朝と夕に祈ることが出来ます。祈れないような現実の中に置かれたとき、祈りの言葉を豊かにしたい時、祈りの本は私たちの心を神様へとリードしてくれます。「真理の平和」を真理の主であられる父なる神様に、イエス・キリストに祈りたい、そのように思わされました。

書名 (ご寄贈書)

著者名など

キリストは甦られた 20世紀レント・イースター名説教集	R. ランダウ 著 野崎卓道 訳	教文館	[緑 198.34 La]
聖書のなかの女性たち	遠藤周作 著	角川書店	[橙 193.5 E]
死海のほとり	遠藤周作 著	新潮社	[黒 193.6 E]

『希望のみなもと わたしを支えた聖書のことば』 船本弘毅 編 燦葉出版社 [青 194 Fu]

上記の本を編集されたのは、福島県地方を襲った大津波のあとでした。被害に出会った多くの方々の苦しみを思い、その方々に直接語るのではなく、出筆者の歩んでこられた時の証と聖書の言葉との出会いとお書き下さり、望みと平安、平和にみちた書物を多くの方々に贈りたく船本先生は87人の方々にお願いして編集したと生前おっしゃって居りました。出筆者は多くのキリスト者や阿佐ヶ谷教会のメンバー多数が投稿されて居ります。特に平和に関しては、先生の小5の時に跡開地から広島原爆の煙りを見た等をはこぶね330号「夏が来ると」に投稿されて居り、原爆の記事を入れて下さい (P.246) とのことで文面に入っています。船本先生は常に世界の平和について考えておられた事を今更のように思い出して居ります。

(シオン会 K.M)



『よく生き、よく笑い、よき死と出会う』 アルフォンス デーケン 著 新潮社 [黒 114.2 D]

人間はそれぞれの人生の旅を歩みながらより「人間としての完成に近づいて行く、いつも進歩しつづける存在で、永遠という大きなゴールに向かって歩いて行く巡礼者である。出会いによって人間は成長する。出会う相手が偉大なる人格者であればある程その出会いも深いものになる。私自身にも若き日に素晴らしい出会いがあった。大切な出会いによって自分の人生観そしてライフワークが形づくられていった。ユーモアと笑いは人生に不可欠のものである。デーケン先生が阿佐ヶ谷にいらした時もしばしばユーモアで皆を笑わせて下さった。死について話す折もユーモアを忘れず明るい希望へとつないで話された。死を目前にした友に何をしてあげられるかよりも、何を学ぶ事が出来るのかは私の大事な問題だった。死について学ぶ事は生きる事の尊さを発見する事で、祈る事の大切さは最も大きなテーマでした。

(シオン会 M.T)



『ユダヤ人イエスの福音 ヘブライ的背景から読む』 河合一充 編著 ミルトス

キリスト教徒とユダヤ教徒の学者が共同して研究する「共観福音書研究エルサレム学派」の紹介を中心に、他の関連分野の研究についても記された本です。ガリラヤ地方が国際的にひらかれた文化的水準の高い土地であり、マルチリンガルも多かったとか、当時は「メシア」の婉曲語、来るべき方・人の子・生木・モーセ以上の預言者等の表現が多く使われていたとか、イエス様が信仰の篤い模範的ユダヤ人の家庭で育ったことが読みとれるとか、一見すると不思議なたとえ話も、ヘブライ語の語呂合わせを含んでいたり、典型的なユダヤ教のたとえ話の型により語られているとか、今まで疑問に思っていた事柄を理解する助けになりました。当時の一般的なユダヤ人の生活や宗教教育も説明されています。

より詳しく知るためには、この本の中で紹介されているものの品切れとなっている研究の解説付きの抄訳集『共観福音書が語る ユダヤ人イエス』もお勧めします。(ときわ木会 Pi)

書名 (購入書)

著者名など

ユダヤ人イエスの福音 ヘブライ的背景から読む 河合一充 編著 ミルトス [橙 193.5 Ka]

共観福音書が語る ユダヤ人イエス 共観福音書研究エルサレム学派 編著 有馬七郎 河合一充 訳 [橙 193.6 Kyo]

イエスは何語を話したか? 新約時代の言語状況と聖書翻訳についての考察 土岐健治 村岡崇光 著 教文館 [橙 193.09 To]

出エジプト記の世界 モーセの一神教を知るために 河合一充 編著 ミルトス [橙 193.21 Ka]